

# 画像工学同窓会会報

1999.10

## 画像工学の今昔

山司 康雄

デジタル化、ネットワーク化の技術革新によって、いま世界はボーダーレスの時代となってまいりました。

印刷・写真分野においても、デジタル化、ネットワーク化の進展は、ご多分にもれず著しく、デジタルカメラ、デジタルプリント、DTP・CTP、画像伝送等々にその成果が見られ、画像工学における技術革新は、まさにボーダーレス時代の象徴とも言えます。このことはアナログで育った我々にとりまして、万感交々今昔の思い尽きぬものがあります。

私が千葉大に入学したのは1950年で、戦争の記憶が未だ覚めやらぬ混沌とした世相の時でした。入学時は工芸学部第4類と称し、化学・写真・印刷が混然一体となつて、誠にユニークな構成に感じら



山司 康雄 会長

れたものです。それが51年に突如、工学部工業化学科に変更になり、それによってそれぞれ写真専攻・印刷専攻・化学専攻での卒業となりました。

その後、それぞれ独立科となり、時代の変化と共に離合集散や名称の変更を重ね、我々卒業生としては覚える間も無く、くるくる変わるのに戸惑ったものです。それはまるで、本籍・出生地を当てさせて判じ物のような具合でした。

それはともかく96年に画像工学同窓会が発足したのは、卒業生としてまことに同慶のいたりであります。

先般、同窓会主催の記念パーティーに出席致しました。卒業生の何人かに就職先を聞いたところ、殆どがカタカナの社名で聞いたことのない会社ばかりなのに驚かされました。おのが不明を恥じるようですが、画像工学を求める企業の変転を再認識した次第です。

ところで、我々アナログ族がデジタルの世界に移住するためには、いま以上に広範囲なメディアが必要になるのではないのでしょうか。そして、そのメディアには、画像工学が応用されるものと考えております。それには、若いデジタル族と、我々アナログ族の交流の場が必要で、その意味からも、同窓会の位置付けは益々重要になってくると思います。

## 画像工学同窓会技術講演会のお知らせ

総会の前の時間に下記の講演会を開催いたします。自由に語って頂ける気楽な講演会です。是非、ご参加ください。なお、参加の有無を振り込み用紙に記入の上送付ください。

記

日 時：平成11年10月8日（金）午後3時15分から5時  
場 所：KKRホテル東京（旧竹橋会館）  
参加費：無料  
テーマ：21世紀の画像技術を語る—第1弾—  
講演1：プリプレスの今後を語る  
（最近のネットワークを中心としたプリプレスの変化など）  
大日本スクリーン製造(株) 郡司 秀明【昭和54年卒】  
講演2：デジタル化により変化する米国印刷業界を観る  
（デジタル化の経緯、メリット及びそれに伴う技術トレンド）  
DDCP、CTP、On-Demand Printingなど  
コダックポリクロームグラフィックス（株）  
榎本 哲巳【昭和46年卒】

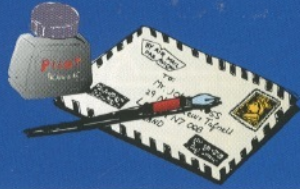
## 総会、懇親会のお知らせ

平成11年度の定時総会および懇親会を下記のように開催いたします。是非、皆様お誘い合わせの上、ご出席くださいますようお願い申し上げます。

記

月 日：平成11年10月8日（金）  
総 会：午後5時から5時30分  
議 題：◆平成10年度事業報告、会計報告  
◆平成11年度事業計画、予算案  
懇親会：午後5時30分から  
場 所：KKRホテル東京（旧竹橋会館）  
東京都千代田区大手町1-4-1  
地下鉄東西線竹橋駅下車 徒歩1分  
会 費：5,000円（当日お支払いください）  
出席される方は、同封の振り込み用紙の出欠欄にご記入の上、10月1日までに到着するようにお申し込みください。

# 会員便り



## アジア各国の印刷事情

(昭和30年卒 田中 崇)

20世紀最大の発明の一つは、印刷だと  
言われている。

情報化時代と言われる現代社会の最も重要な技術は、情報流通の技術とシステムである。これなしでは現代社会は成立しない。情報の形は、文字中心からカラー写真を含むトータル画像情報へと発展している。その画像処理の技術には、印刷物の品質向上のための長い研究の成果が、現在の新しいメディアの画像処理技術の発展にも大きな貢献をしている。

印刷業界では、空気と水以外は何でも印刷できると宣伝している。実際、私たちの身の回りのものほとんどは印刷技術と関係がある。書籍や雑誌などの出版物から新聞・商業印刷物、ポスター・看板・全てのパッケージ類、さらに、家具やプリント模様の衣類・電子部品まで全ての日用品に印刷が関連している。このことは、世界中の人々が、印刷製品に囲まれて生活しているということである。

日本には、大小4万社もの印刷会社があり、年間の売り上げは、約10兆円である。世界的に見ると、アメリカ・日本・ドイツが印刷大国で、印刷産業はそれぞれの国の大きな産業になっている。また、

印刷関係の機械産業も発展している。前述の3カ国のほかに、ヨーロッパの先進国や、南米ブラジル・アルゼンチン、アジアでは、韓国・シンガポール・ホンコンなどが世界水準の印刷技術を持っている。最近の機械・技術の状況を観ると、コンピューター関連はアメリカ、機械関係は日本・ドイツで作られたものが世界中に行き渡り、という寡占状態である。30年ほど前にはスイス・イタリア・スウェーデン・フランス・イギリス・アメリカ製の印刷機械が日本でも大量に使われていたが、現在では、日本で使われている印刷機械のほとんどが日本製かドイツ製である。

現代の情報化社会では、世界中の全ての国でコンピューターが使われ、ビジネス分野や市民生活になくはないものとなっている。また、すべての国に印刷会社があり、本・教科書・新聞・宣伝物やパッケージを作り、社会生活を支えている。もちろん、印刷機械や材料・技術は自国製のものがなかったり品質不全なので、主としてアメリカ・ドイツ・日本からの輸入品である。しかし、数年前から、DTP技術の進歩によって、カラー画像処理・カラー印刷の品質向上がめざましく、世界中の印刷物品質の平準化が達成されている。シンガポール・ホンコンやブラジル・コロンビア・インドまでが、世界最新鋭のプリプレス・印刷・加工の設備によって、アメリカ・ヨーロッパからのカラー画像処理・印刷・加工の仕事を受注している。これらの国では機械設備は高価であるが、安い土地・建物コストと日本の十分の一以下の労働コストによって、加工賃産業である印刷の仕事の国際競争力を保っている。最近までは、発展途上国の製品は、安かろう悪かろうであったが、画像処理機器の進歩

によって品質は格段に向上した。さらに、東南アジア各国では、英語に強い社会体制と、セールスツールとしてのISO9000の取得によってアメリカやヨーロッパ受注が急速に拡大している。シンガポールの印刷業の総生産の半分近くは、アメリカやヨーロッパからの受注である。ホンコンの印刷会社は、東京のブックフェアで日本からの本の印刷・製本の受注活動をしているし、韓国の印刷会社は、東京国際文具フェアでカラー印刷の紙袋や文房具の受注活動をしている。シンガポールの印刷会社は、著作権フリーのカラーイラスト集のCD-ROMを東京で発売している。

私が毎年ODAで指導している従業員1,500人のインドの印刷会社でも、毎年数億円の仕事をアメリカ・ヨーロッパから受注しているし、昨年ISO9002も取得した。今年は日本からの印刷の受注をしたいと検討している。この会社の従業員の平均賃金は、月収10,000円で、ドイツ製の印刷機械・製本機械ばかり50台の設備を持つ大会社である。

以上の例でも分かるように印刷や画像処理の仕事は、世界的に処理設備・材料・制作システム面で品質の平準化が進み、国別の受注の垣根も取り払われている。ブルネイの印刷会社では、高級デザインの製版をシンガポールに発注しているし、オランダで編集発行される書籍がシンガポール経由でインドで印刷・製本されている。日本の製造業は、すでに、普通の製品の国際競争力はなくなっている。これからは超高級品や新製品の分野だけが日本の製造業の生きる道である。印刷のように、製品が直接消費者に届けられない製品の国際競争力の持ち方が難しいところである。

## 特別会員：近藤厚美

(元教授)

杉並区永福の自宅から5分位の所に善福寺川があり、その兩岸に帯状の公園が約6キロ程連なっている。定年退官後毎日1時間位この公園内散歩をするのを日課としており、これが89歳の今日まで長生きできた原因かも知れない。8年前に絵を描く楽しさを知り、今日まで水彩・油彩の大小合わせて500枚以上を描き、毎年7-8件の展示会に出品をしてきたが、満足な作品はまだ1枚もない。掲載の写真は、毎日散歩をしている川沿いのコースであって、杉並区街づくり公社の公募に入選し、絵葉書となった10号油彩画である。

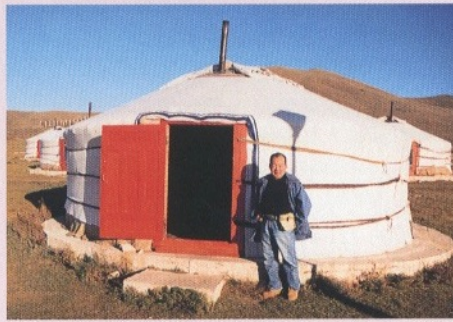


## モンゴルへ行って来ました

(昭和33年卒 古矢泰一)

昨年のこと、テレビの番組の中で歌手のオユンナさんが母国のことに触れるのを見かけましたが、その時の「地平線から地平線まで夜空いっぱい星が現れる」と言う言葉が印象的で頭の片隅に残りました。彼女の言うような体験は絶えて久しいし、これからもこの国に居ては無理でしょう。丁度9月が夏休みになったことでもあり、無性に行ってみたくになりました。調べてみるといろいろ判ってきて、日頃遠い異国の地のように思っていたモンゴルも関西空港からウランバートルまでは4時間で行けるのです。意を決して3泊5日乗馬トレッキングツアーなるものに申し込みました。その後さらに判ったことは、モンゴルツアーは結構人気があり特に女性に隠れたファンが多いということです。

同行8名のメンバーにも典型的な一組を見かけました。モンゴル・ツアー経験者であるキャリアウーマンの娘さんがお父さんを強く誘って来ていたのです。そのお父さんとはゲルで同宿でしたが、初めこそ是非もなく来てしまったと言う風が、日が過ぎるにつれ文句の無い顔に変わるのが微笑ましかったのです。そう、見渡す限りの草原や往復40キロの馬上トレッキングなど、



小生には充実した楽しいツアーでしたが、中でもオプション・イベントの「羊一頭食べ尽くしパーティー」が印象的でした。2キロほど離れた遊牧民のゲルを皆で訪れると馬乳酒の接待があり、すぐにイベントがスタートです。

いつもは孫の相手をしている家の長老のジイちゃんがここでは生き生きと腕を振ります。選ばれた羊は仰向けにされ、半分催眠状態の仄かな声さえ立てることなく往生してしまいます。どのようにするのかは余りに生々しく、この場では詳しく触れませんが、ちゃんと見届けては参りました。まさにマーシー・キリングの典型、鮮やかな手並みです。続けて解体が進みますが、血の一滴も地べたにはこぼさない。彼らにとって大地は人の手も加えてはならない程の神聖な物なのです。この辺が内モンゴル自治区の農耕従事者と思

想的に一線を画する処かも知れません。ナイフ一本の作業では背骨からあばらを外すのが見たところ一番大変そうだ、などという話も生々しいので止めます。

僅かな間に金盥に山盛りの肉塊が出来ますが、これをストーブ上の酪農・牛乳缶様の鍋に水、塩、形ばかりの野菜と共に放り込み、ついでに真っ赤に焼いた石も放り込んで待つこと1時間、熱々をそのままワイルドにいただきます。肉は全く臭くはありません。何しろ人工飼料ゼロ、ハーブ風の草原の草だけで育った羊なのですから。

宴を終え、オユンナさんの話通りの満天の星を頭上にして、一人真っ暗な草原を懐中電灯を頼りに宿舎に戻った体験も、忘れることが出来ません。

小生も来年の退職に向けてどうにか長らえて参りました。在職中とはいえ、いざとなると3泊5日の旅というのは”余暇貧乏国ニッポン”ならではの話です。来年からは余暇こそ望めますが肝心のみ入りの方が思うにまかせません。所詮人の世は $N \cdot V = N' \cdot V'$ なのか。でも体の動かせるうちが華なのです。せいぜいこれからも分不相応の日本脱出活動が続ける様心掛けるつもりです。皆様も心の内に秘めた”本当に”やって見たい旅に挑まれてはいかがでしょうか。我が敬愛する同期生K氏はオーロラと南極が見たいのだそうです。

## 近況報告：(カナダライフ)

(昭和63年卒 永田智久・ひとみ)

カナダに駐在員として早2年が経ちました。ここは、ロンドンというトロントから車で約2時間のカナダでは、比較的大きな市です。日本人はあまり多くない分、狭い日本人社会の中でお互いに情報交換したり、助け合いながら生活しています。今まで私が住んできた日本に比べると、自然が豊富で住みやすい所です。買い物もとりわけ不自由することなく、そこそこ日本的な食事で生活する事が出来ます。医療的にも特に心配なく、治安も悪くありません。カナダは移民の国だけあって、近所にも会社にも肌の色が違う人が、ごく当たり前居ます。言葉の不自由さは、相変わらずですが英語を話せない人もそれほど珍しくないようで、相手が調子を合わせてくれます。勿論言葉が通じないために起きた失敗談も少なくありません。私なりに、カナダ人の生活を見ていると賛否両論有るでしょうが、人間らしい、自由な生き方をしているという感じがします。決して資源豊富な裕福な国で無く、夫婦共働きが一般的ですが、仕事も定時になるとすぐに家に帰り、家の仕事を家族で分担します。家族で過ごす時間をとても大切にしているが故に、残業などは、

あまり歓迎されません。こうした気さくで友好的な人たちと付き合っていると、無責任な仕事ぶりに時として苛立ち、しかし憧れてしまうのも日本人の暖昧が故なのでしょうか？駐在員達が日本に帰国すると、暫く”リハビリが必要だ”という話を聞きます。最近の自分を振り返ると、あながち冗談で無い気がします。”生まれ変わるなら駐在員の妻”と言われるほど気楽だとされる駐在員の妻達も、さほど気楽とも言えない点も多いのですが、いずれ”リハビリ”が必要になるのでしょうか。いずれにしても折角の海外駐在と言うことで、この時間をなるべく楽しく有意義に過ごしたいと考えています。



## 先輩たちあつての仕事？

平成2年卒 中村 幹



私は、印刷学会出版部というところで、『印刷雑誌』という月刊誌の編集の仕事をしています。変な社名ですが、れっきとした株式会社で、業態は純粹の出版社です。名前のおと、印刷学会の出版部としてスタートしたようなので、このような社名になっており、よく間違われます。現在は『印刷雑誌』が社団法人日本印刷学会の機関誌の一つになっていて、学会とは『印刷雑誌』を媒介とした繋がりだけであり、資本関係もないものは一切ありません。学会が、機関誌発行の一つを当社にアウトソーシングしているという捉え方で考えるとわかりやすいと思います。ちなみに、機関誌のもう一つは『日本印刷学会誌』でして、こちらは山岡先生が編集委員長になっています。

さて、その『印刷雑誌』は、学会会員への機関誌として毎月社団法人日本印刷学会に納めさせていただいているのですが、当社が発行元であり、直売している部数がかなりあります。書店の店頭には並んでいませんが、書店から購入していただいている読者も結構あります。そのため、私は『印刷雑誌』の製作以外に販売や営業にも携わって、何とか一人でも読者を増やそうとがんばっている日々なのであります。

私の仕事は、同窓会の諸先輩方あつての内容になっています。そこで、ある日の私の仕事を紹介したいと思います。

### ○月△日 大阪出張

今日と明日は日本印刷学会の秋期研究発表会が大阪であるので、単身新幹線に乗り込む。千葉大の古矢先生のところの齋藤さんと大日本インキの相田さんが発表で来ていた。夜には大日本スクリーン製造の鳥山さんと合流する手筈を齋藤さんがとっていて、鳥山さんに京都から出てきてもらい4人で大阪で呑むことに。ちなみに、この鳥山さんは当社から好評発売中の『Windows DTP』の著者です（宣伝ですみません）。

相田さんと齋藤さんは一緒にホテルの部屋をとっていたので、同じ部屋に潜り込ませてもらう。宿泊代が安くすんだ。

行きは一人ビジネスマンという感じだったが、東京への帰りは3人で酒盛と睡眠のおじさんの時間だった。

### ○月△日 夜

仕事とは直接関係ないが、今日はCD勉強会。CDとはChiba-Daiの略で、大先輩である千代田マシナリーの古賀社長のご好意で会議室をお借りして、古矢先生を会長に、日本技術協会にいた竹原さんや小早川先生、共同印刷の池田さんやプラザ協議会の五百旗頭（イオキベ）さん、山田写真製版所の山田副社長、EPC-JAPANの松浦さん、アグファの草柳さんなどなど、いろいろな卒業生が出席して毎月行っている勉強会だ。

### ○月△日 昼

普段オフセット中心に動いているが、今日は川口にあるフレキシオン製版社のアルファグラフィックスに取材に行く。部長の藤井さんはデュボンで印刷関連に携わっていて、写真科の先輩。写真系の先輩も印刷産業に従事している方が多い。印刷学会の会長で東海大の高橋先生も写真科の先輩だ。

### ○月△日 日曜日

今日は仕事でなく、國司先生の佐倉の別邸へ梅取りに行く。毎年、6月の梅と9月の柿の時期にはお邪魔する。メンバーはだいたい、千葉大の印刷工場の遠山さんと前述の齋藤さんと、取り終えたらすぐに、4人でやるものをやる。

先生は昼より夜の方が元氣だ。お会いするのもなぜか銀座という場所が多い。メンバーは齋藤さんや光野印刷工業の丸山さん、東芝エンジニアリングの伊藤さん、友信堂印刷社の若山さん、フォレストの茂木さんなどが多い。

### ○月△日 夜

編集部のMacのハードディスクがいかれ、グラバックジャパンの大森さんにヘルプの電話をする。私は、大森さんの同期の先輩にはかなりお世話になっているかもしれない。前述の丸山さんや業界で有名な大日本スクリーンの郡司さん、エイボンの岡村さんらがいる。

### ○月△日 夜

今日は日本印刷学会の総会。私の立場は取材スタッフ。懇親会が終わり、北村先生と大日本インキの鳥海さんのところへ行き、日本橋で呑む。北村先生と鳥海さんは変に仲がよく怪しい。

鳥海さんは、現在印刷学会の理事にもなり、いろいろとやり取りする回数も増えた。夜も日本橋でご馳走になってしまうこともある。鳥海さんは結構呑む。

### ○月△日 昼

今日は、松本先生が会長をしている印刷教育研究会の見学会。見学後、暑かったので6人ほどでビールへ。その後、帰る方向が千葉方面と一緒になので黒川先生と最後は下総中山駅のスナックで呑む。夕方5時から朝1時まで8時間も呑んでしまった。先生は本当にアルコールが好きらしい。私の肝臓がカローラだとしたら、きっと先生のはベンツか、いやいやダンプに違いない。

よく呑みに連れていってくれたグラバックジャパンの湯本社長や、印刷技術協会の山内さん、前述の鳥海さんと齋藤さんもこのクラスだと思う。

卒業してまだ10年に満たないですが、このほかにもプロセス資材の正田さんと帆風の犬養社長、共同印刷の土屋さん、大阪の大同印刷の岩田一族、サンメッセの田中さんなどなど切りがないほど、私は先輩方に支えられて仕事しています。また、EPCにいた松根さんや、グラバックの平賀さんには、プライベートでもお世話になっています。グラバックジャパンの湯本さんとはアメリカに3度も一緒に行き、日本でも昼も夜も非常にお世話になりました。

私の卒業時は、國司先生が就職担当で、「出版をやりたい」と言ったところ、「いい会社がある」とだまされて(?)、今の会社に就職しました。いろいろな人に会える仕事であり、先生にはとても感謝しています。また、そりゃ多々不満はありますが、好きに動いて仕事していく立場にしてくれた大先輩であり社長の山本隆太郎にもやっぱり感謝しています(よいしょ!)

## 新入会員歓迎会

(新卒者を励ます会)

新入会員である画像工学科の新卒業生を囲み、懇談会を行う予定です。皆様是非ご参加ください。

日時：平成12年3月23日(木曜日)

卒業式、学位授与式終了後

場所：千葉大学学生会館

## 年会費納入のお願い

平成8年9月に工芸写真会と芝葉印刷学部会を含む会員数約4,600名の画像工学同窓会が発足してから3年が経過いたしました。まだ、十分な活動が行われている状況ではないのですが、同窓会の会報発行などの活動運営は主に会員からの年会費でまかなわれております。同窓会の活動を活発に行うために皆様からの年会費の納入を是非お願いいたします。

会員の皆様には、年会費1,000円を同封の振込用紙により納入いただきますようお願い申し上げます。

千葉大学画像工学同窓会

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学工学部情報画像工学科内

電話・FAX：043-290-3479

### ～寄贈のご紹介～

東京高等工芸学校印刷学科第12回卒で国際母型株式会社の細谷敏治氏から、千葉大学工学部画像工学科に、ベントン彫刻機（国産第一号機）及付属機器、パンチ（打込）用プレス機関係、新聞用パンチ母型製造に用いたパンチ（約10,000個）が寄贈されました。これは、昭和58年頃、毎日・読売・サンケイ各社の東京・大阪・西部で採用された各モノタイプ用の母型を完全に製作した際に利用されたもので、現在は、千葉大学工学部の資料室に保管されています。そのベントン彫刻機について、細谷氏に説明文をお願いしました。

### ベントン彫刻機と活字母型の変遷

昭和22年、株式会社三有堂（筆者の当時の勤務先）と大日本印刷株式会社との協力によって、精密工作機械のトップメーカーである株式会社津上製作所（新潟県長岡市）に依頼して約2年を要し、我が国最初の国産第一号機のベントン母型彫刻機が誕生したのである。そもそもベントン彫刻機とは、1885年に米国のリンボイド・ベントンが考案したもので

あって、米国活字鋳造販売会社がこの機械を利用して、米国のトップ活字会社として君臨していたのである。ベントン彫刻機はパントグラフの原理を応用した極めて精巧な機械であり、その精密度は1/1,000吋を保持しているの、4ポイント活字（約1.4mm）に対してその一端に約300文字を彫刻出来る。（筆者はこの現物活字を保有。）このように精巧なベントン母型彫刻機の国産化に成功したことは、我が国の文字印刷文化に多大な役割を果たした。

前述のベントン彫刻機というのは、もともとベントンが活字を彫刻する目的で考案したものであるが、それに飽きたらず、父型、つまりパンチ彫刻機として完成されたのである。後年、母型彫刻専用機として今日見るような形状のものになったが、アメリカタイプハウダーではこの機械を他に販売することはなかったと言われている。ベントン彫刻機は精巧な機械であることは、前述の通りであるが、母型の彫刻能率が極めて悪い。そこで登場するのがパンチ母型である。パンチ母型（打ち込み母型）は、彫刻母型と異なり、先ずベントン彫刻機を用いて

活字型の軟鋼の一端に凸形の文字を彫刻してこれを熱処理硬化して字面を研磨し、黄銅（真鍮）の母型材料にプレスしてつくる方法である。この方法では、細い画線が交錯した明朝体を、正確に鋼材に凸形文字を彫刻することは、欧米文字の場合とは異なり至難のわざで、一種類の文字を一揃い数千も彫刻することは、かなりの年月を必要とする。しかし、一旦完成した暁には、打込法によって母型が出来るので、直刻法に較べてその能率には比較にならない格段の差がある。つまり量産が可能なのである。ただこの鋼鉄材料に直刻する方法には、大変な技術的ネックがあったので、この方法に代わって新しく、焼結法によるパンチ母型が製造されるようになった。この方法も筆者が開発したものである。つまり、「神崎正誼の手彫り彫刻による清朝体父型（明治9年）」を第一世代として、「ベントン彫刻機を利用して鋼材に直刻して作る鋼鉄父型によるパンチ母型（この方法は筆者の特許）」を第二世代とするなら、「焼結法によるパンチ母型製造法」は第三世代といえよう。

## 画像工学同窓会関西支部

画像工学同窓会関西支部の総会が、7月17日に大阪東洋ホテルにて午後6時より開催されました。新名称になって第2回目の総会になります。大学より大野教授、甘利教授、北村教授にご出席頂き、さらに今回は東京より古賀顧問（前工学同窓会会長）、山本隆太郎（印刷学会出版部社長）の両氏も出席くださいました。

最初に先生方より大学の現状、学生の就職状況、同窓会の状況、などをお話し頂き、その後懇親会に移りました。

本会は着席式のパーティで、コンパニオンも付けているため、話も弾み楽しい一時をすごすことが出来ました。（特に、今年のコンパニオンの一人が、千葉の小仲台の出身だとかで盛り上がっていました。）総会出席者は27名で、前回より少し減りましたが、新しい参加者も出て来ており、今後の発展を思わせました。（出席予定で、急に所用ができて欠席した方が4名いたのが残念）参加者をいかに増やすかの話題になり、写真系の出席者があまり増えない為、滝田進弘氏（大日本スクリーン）に写真系の出席者の

勧誘をお願いすることになり、来年の総会を楽しみに待つことになりました。なお、画像工学という非常に限られた学問のため、仕事の悩み、技術の話など、話の通じる場所として、色々な情報交換の場所としても、ぜひ続けて行きたいと思っています。

最後になりましたが、今年より出席して下さる先生方の交通費を本部会計で負担して頂けることになり、又維持会費を振り込んで下さる方も相当数になり、運営も少し楽になってきました。ご協力いただきました先生方、会員の皆様にお礼申し上げます。

維持会費をお支払いの方には、総会案内時に会計報告と写真をお送りしています。住所変更の場合はぜひ下記の所までFAXください。来年も同じ場所の東洋ホテルにて、7月15日（土）に開催します。

連絡先：〒538-0053 大阪市鶴見区鶴見4-6-4

大同印刷（株）内 岩田克彦まで

Tel 06-6934-2121内線400、Fax 06-6934-0201



## 学 科 の 近 況

### 1. 情報画像工学科

昨年度のこの欄におきまして、工学部の改組に伴い、画像工学科が情報工学科とジョイントして「情報画像工学科」となりました。言うに及ばず、今や画像とコンピュータは切っても切れない関係にあり、二つの学科の合体は当然の流れと言えるでしょう。今年度の情報画像工学科の入試はかなり狭き門だったようです。画像が情報と一緒にになったことにより、まさにsuperadditivityで、合体前のどちらの学科よりも倍率も偏差値も上昇し、工学部でトップになりました。新学科に対する期待の大きさを感じさせます。この期待を裏切らぬよう、名前だけの合体にとどまらず、教育システムが有機的に機能し、画像産業界に情報に強い卒業生を多く送り出せるようにと、身が引き締まる思いがします。

学生は2年生の後期から希望により情報工学コース、画像材料工学コース、画像システム工学コースの3コースに分れて勉強します。3年の後期に半期の卒業研究I、4年で通期の卒業研究IIがあります。卒研Iは必修ですが、卒研IIは選択必修です。卒研IIは卒研Iとは異なる分野で行うこともできます。卒研IIを履修しないものは専門科目の必要修得単位数を



12単位余計に取らなければなりません。学生が大学院へ進学する場合、修士課程では、画像系の学生は像科学専攻で画像関連の教育を、また、情報系の学生は知能情報科学専攻で情報関連の教育を受け、博士課程で再び画像系、情報系の学生と一緒に専攻（情報科学専攻）で教育を受けられるようなシステムになっています。現在、学部から博士課程まで、一貫した組織となるよう改組を計画中です。

1年生の前期、つまり大学へ入るとすぐにセミナーという科目が実施されます。これは入学してきた学生がなるべく早い時期に学科の教官と親しく接する機会を設けることを目的としています。10名弱の学生が一班となり、2週ずつ6つの分野をまわります。何をやるかはまったく分野にまかされており、内容は非常にバラエティーに富んでいます。最先端の研究動向等を話して聞かせる先生もいれば、スポーツを通してコミュニケーションをはかっている先生もいます。正直言って、何をやったら戸惑っている教官が多いようですが、学生には好評のようです。

### 2. 学科の組織

表（下記）に新しい学科の組織をまとめました。

小林裕幸

コース	分野	教授	助教授・講師	助手	技官
情報工学	情報システム	谷萩隆嗣 蜂屋弘之	呂 建明		
	計算機システム 数理情報工学 知識情報工学 認識情報工学 計測情報工学	伊藤秀男 松葉育雄 井宮 淳 市川 薫 安田嘉純 三宅洋一	須鉦弘樹 岸本 渡 大沼一彦	大豆生田利章 植田 毅 堀内靖雄 諏訪 純 津村徳道	
画像材料工学	写真材料工学 印刷材料工学 光機能材料工学 画像形成工学 像機能材料工学	大野隆司 甘利武司 山岡亜夫 北村孝司	大川祐輔 小関健一 高原 茂 星野勝義 小林範久 森田 浩 久下謙一	柴 史之 石井千明 宮川信一 中村佐紀子 島 芳也	岡野正明    田中豊英
	光物性工学	長谷川朗			酒井朋子
画像システム工学	写真工学 印刷工学 像変換工学 視覚工学 光工学 画像物理学 印刷実験工場	小林裕幸 日野照純 小寺宏暉 矢口博久 本田捷夫 立田光廣	塩入 諭 羽石秀昭 尾松孝茂	青木直和 岩崎賢太郎 古矢泰一 杉浦恪也	斎藤了一    遠山政夫

像機能材料工学分野の広橋亮先生と印刷工学分野の種田靖夫先生が昨年3月31日をもって、光物性工学分野の三位信夫先生と像変換工学分野の山口隆司先生が本年3月31日をもって定年でご退官されました。

中村佐紀子先生と青木直和先生が助手に昇任されました。中村先生は画像形成工学分野、青木先生は写真工学分野へ移られました。青柳象平先生が教授に、田中恒雄先生が講師に、そして相良頼巳先生が助手に昇任され、そろって新設の都市環境システム工学科へ転出されました。長谷川朗先生がご退官された三位信夫先生の後任として光物性工学分野の教授に就任されました。旧情報工学科の計測情報工学分野で三宅洋一先生と一緒に研究をされていた羽石秀昭先生が、光工学分野に移られました。大川祐輔先生が写真材料工学分野の講師に昇任されました。写真材料工学分野には自然科学研究科が本務の助手として柴史之先生が新規採用されました。柴先生は千葉大学画像工学専攻で修士を修了された後、東北大学素材工学研究所の杉本忠夫教授の下で単分散粒子の核生成についての理論研究を行い、学位を取られました。活躍が期待されます。

詳しい情報は学科のインターネットホームページ (<http://www.tj.chiba-u.ac.jp>) でご覧になれます。

(学科長,小林裕幸記)

## 大江茂先生が「勲三等瑞宝章」を受賞されました。

平成10年11月10日、大江茂先生は「勲三等瑞宝章」を受賞されました。

先生は昭和17年9月に東京高等工芸学校写真部（現千葉大学工学部画像工学科）を卒業され、直ちに大日本航空写真航測所に就職されましたが、昭和17年10月から21年8月まで兵役に就かれました。その後写真関連の仕事に従事されましたが、昭和29年4月に千葉大学工学部助手として任用され、昭和44年7月に工業短期大学部教授、昭和55年12月に工学部教授、昭和63年3月31日に定年退官され、同年4月に千葉大学名誉教授の称号を受けられました。この間、先生は昭和45年2月から1年間文部省在外研究員として米国ペンシルバニア大学に留学しコンピュータアニメーションの研究を行い、昭和51年6月に東京工業大学より工学博士の学位を取得されました。

平成11年1月7日 KKR HOTEL TOKYO（竹橋会館）で関係者が大勢集まり、大江先生ご夫妻を囲んで受賞祝賀会が開催されました。



## 三位信夫先生が定年退官されました。

三位信夫先生は平成11年3月31日で定年退官され、同年4月千葉大学名誉教授の称号を受けられました。

三位先生の最終講義が平成11年3月3日、千葉大学の「けやき会館大ホール」で挙行されました。卒業生、在学生、教職員が多数出席されました。三位先生は「銀塩写真とデジタルカメラ」と題して、液晶プロジェクターとパソコンを用いて美しい画面を駆使して講義を進められました。講義終了後、会場を大学会館2階に移して茶話会が開かれ、三位先生を囲んで和やかに歓談が行われ、盛会のうちにお開きとなりました。

三位信夫先生退官記念パーティーが平成11年10月16日（土）正午より学士会館にて開催されます。



## 入江春雄先生が逝去されました。

平成11年2月20日、入江春雄先生は肺炎のため急逝されました。享年88歳でした。

入江先生は昭和9年4月東京帝国大学理学部化学科に入学されましたが病気のため中途退学され、病気快復後東京帝国大学第二工学部応用化学科の聴講生になられました。先生は昭和19年12月東京帝国大学助手に任用され、昭和27年5月千葉大学助教授工学部応用化学科写真映画専攻に配置換えになり、昭和43年9月に教授、昭和51年4月1日に定年退官されました。先生は昭和43年に東京大学より工学博士の学位を取得されました。先生は写真材料、特にゼラチンの写真特性・物理化学性について教育・研究を熱心に行い、日本写真学会より技術賞及びゼラチン賞を受賞されました。入江先生は写真用ゼラチンの国際研究組織(IAG)や英国王立写真協会(RPS)においてもゼラチン研究者として高く評価されています。

入江先生の退官記念事業報告に、先生は「私は病気のため、

世に立つこと遅く35才の時初めて東京帝国大学助手として勤務、菊池真一先生のご指導によって今日に至ったのですが、平素『たゆみなく歩み登らば白雲の上なる峰にいつかどこかむ』と心に唱いながら努力して参りましたが才拙く、智鈍く、今日、なお峰は遙かに遠く見ゆる如くでございます。併し幸い尚健康に恵まれておりますので、残された命のかぎり初志を追い求めて参る所存でございます。今後ともご好誼をお願い申し上げますと共に末筆ながら貴台のご健康を祈りあげます。」と書かれておられます。入江先生のお人柄が偲ばれるお言葉です。

平成11年3月14日（日）午後1時より入江春雄先生の「お別れ会」が学士会館で挙行されました。入江先生に関係の深い大勢の皆様が献花をして先生にお別れを致しました。

この世に命を受けた人の常とはいえ、入江先生が急逝されたことは、誠に痛恨哀惜の念にたえません。謹んで入江春雄先生の御冥福をお祈り申し上げます。

## 川俣正一先生が逝去されました。

元千葉大学工学部画像工学科教授 川俣正一先生は、8月7日肺性心のため逝去されました。享年77才。先生は印刷技術の発展に多大なる貢献をなされ、特に金属腐食、平版印刷の湿し水、文字印刷の基礎研究では多くの学術論文を発表なさいました。そして、昭和40年には日本印刷学会論文賞および昭和57年には

野間賞を受賞なさいました。

千葉大学在職中、先生の熱心な講義を聴いて育った学生は約1,600名以上となり、先生に面倒をかけた学生が大勢おりました。先生にはもっともっと長生きしていただきたかったと思っております。先生のご冥福をお祈りいたします。

## 平成9年度事業報告

## 1) 定時総会

総会および懇親会を平成9年12月5日(金)KKRホテル東京(東京竹橋)にて開催した。総会では、はじめに会長挨拶が行われ、続いて平成8年度事業報告、会計報告、監査報告が行われ承認された。そして、工芸写真会、芝葉印刷学部会、関西支部の報告が行われた。さらに、平成9年度予算案および事業計画について説明があり承認された。引き続き、懇親会を開催した。参加者は45名であった。

## 2) 会報(創刊号)の発行

平成9年10月に創刊号を発行した。会長挨拶、同窓会設立の経緯、挨拶、会則、役員、会計、関西支部便り、会員便りなどで構成した。なお、表紙は野田栄三氏、印刷はグラパックジャパンの協力を得て行われた。

## 3) 新入会員歓迎会(新卒者を励ます会)

新卒者を励ます会を平成10年3月23日(月)千葉大学画像工学科の卒業式の後に、千葉大学学生会館にて開催した。

## 画像工学同窓会平成9年度会計報告

(平成9年4月1日～平成10年3月31日)

## 収入の部

内訳	決算
前年度繰越金	8,576,223
新入生入会金	1,090,000
総会会費	180,000
新卒者を励ます会会費	0
年会費・寄付	1,582,180
広告代	100,000
利息	15,316
小計	2,967,496
合計	11,543,719

## 支出の部

内訳	決算
委員会費	17,382
新卒者を励ます会	260,500
総会経費	390,220
通信費	695,035
会誌編集発行費	514,458
雑費	8,741
慶弔費	0
小計	1,886,336
次年度繰越金	9,657,383
合計	11,543,719

## 次年度繰越金(平成10年度残高)内訳

定期預金(千葉銀行)	5,000,000
普通預金(千葉銀行)	2,596,243
郵便振替	1,831,400
現金	43,482
合計	9,471,125

## 平成11年度事業計画案

## 1) 定時総会および懇親会

平成11年10月8日(金)午後6時からKKRホテル東京(東京竹橋)にて開催の予定

## 2) 会報の発行

第2号の発行を予定する。

## 3) 新入会員歓迎会(新卒者を励ます会)

新卒者を励ます会を平成12年3月23日千葉大学画像工学科の卒業式の後に、開催する予定。

## 4) 第2回技術講演会

総会の前に開催する予定。

## 5) 関西支部

平成11年7月17日(土)大阪東洋ホテルにて総会を開催。

## 幹事会

平成11年5月14日(金)アルカディア市ヶ谷にて開催。  
平成10年度事業報告および会計報告、平成11年度年間計画の検討、役員、総会準備、会報の発行などについて検討。

## 平成10年度事業報告

## 1) 定時総会

総会および懇親会を平成10年10月9日(金)KKRホテル東京(東京竹橋)にて開催した。総会では、はじめに会長挨拶が行われ、続いて平成9年度事業報告、会計報告、監査報告が行われ承認された。そして、工芸写真会、芝葉印刷学部会、関西支部の報告が行われた。さらに、平成10年度予算案および事業計画について説明があり承認された。引き続き、懇親会を開催した。

## 2) 新入会員歓迎会(新卒者を励ます会)

新卒者を励ます会を平成11年3月23日(火)千葉大学画像工学科の卒業式の後に、千葉大学学生会館にて開催した。

## 画像工学同窓会平成10年度会計報告

(平成10年4月1日～平成11年3月31日)

## 収入の部

内訳	決算
前年度繰越金	9,657,383
新入生入会金	840,000
総会会費	180,000
年会費・寄付	264,220
工学部同窓会より活動費	59,000
利息	14,619
小計	1,357,839
合計	11,015,222

## 支出の部

内訳	決算
委員会費	109,750
新卒者を励ます会	350,000
総会経費	448,586
通信費	562,570
雑費	45,520
慶弔費	27,671
小計	1,544,097
次年度繰越金	9,471,125
合計	11,015,222

## 平成10年度の総会で新しい役員が決まりました。

役員紹介(平成11、12年度)

会 長 山司康雄

副 会 長 日比野繁雄、山岡亜夫、小林裕幸

幹 事 長 甘利武司

副幹事長 岩田克彦、大野隆司、豊田芳州

幹 事 席 務 ○北村孝司、大沢慎一、志村暉雄、斎藤了一

会 計 ○矢口博久、田中恒雄

会誌編集 ○小林裕幸、湯本好英、岩崎賢太郎、

中村幹、田貝秀文

名簿管理 ○小関健一、古矢泰一、相良頼巳、青木直和

関西支部 岩田克彦、花畑雅之

会計監査 ○野田栄三、正田章、海野元弘

顧 問 井下廣、角田隆弘、大江茂、川俣正一、山本隆太郎、

阪口富弥、江越壽雄、渡辺一平、国司龍郎、久保走一、

古賀健一郎、松本和雄、藤田互、田中崇、土屋元彦、

三位信夫、高橋恭介、吉村実